

伊能忠敬の種子島測量（2）～測量終了後の賞罰の事例から実態を探る～

西之表市立図書館長 鮫嶋 安豊

島間は歴史ある港である。江戸時代、種子島氏に納める米倉庫（年貢米）が四軒建ち並び、島間駐在の奉行が置かれ、特に屋久島を指呼の間に望む重要港であった。中種子村・南種子村の収穫米は、島間港に運ばれ、西之表や鹿児島・大阪へと輸送された。更に琉球旅（沖縄）は秋北の風（10月頃）で琉球へ下り、翌年の荒南風（7月頃）で帰島する琉球旅も行われた。ところで、伊能隊測量当時の島間の庄屋は市郎右衛門である。

深夜、幕府の測量機材と薩摩藩役人 100 余人の膨大な荷物を満載した大型帆船が北西の季節風に煽られ、赤尾木入港を諦め、急遽島間に入港したのは夜 10 時過ぎ、島間は大騒動となった。積荷の処理はさておき、即、100 余人の宿屋の準備、翌朝の飯炊き・昼食の準備も采配しなければならない。隣村の庄屋（野間村・坂井村）に依頼するが、事が急であるとして断られる。最後の望みは島間村であった。島間在番奉行と庄屋市郎右衛門はこれを引き受け、迅速・的確に一件の遺漏もなく、処理したと記されている。その功績により、測量終了後、島間村は特別表彰された。

しかし、測量終了後、郡役人羽生道潔は本藩へ呼び出され、「種子島側の対応の拙さを指摘された」と記している。測量隊に対する島人の本当の実態はどうであったのだろうか？測量に協力的であった人々には次のような種々の特典が与えられている。

- ① 測量隊へ協力した人に米 2 斗～4 斗、村役人に米 1 石～4 石を与える
- ② 荷物の運送、旅宿の修理、厠、浴室を作るなど協力者へ賦役の免除
- ③ 足輕を郷土に昇格
- ④ 炊飯協力者には浦受銀（港湾税）の減免
- ⑤ 豆腐や蚊帳の提供者の表彰



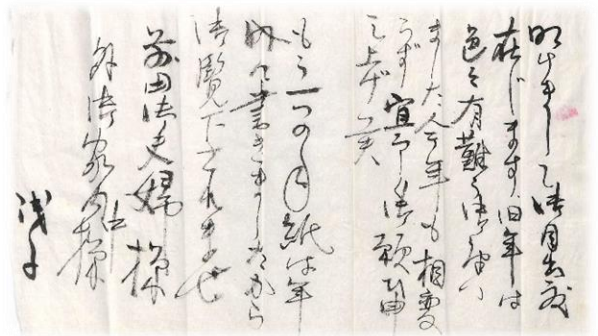
伊能測量記念碑 (島間港)

一方、測量隊に非協力的であった侍が、叱責された事例がある。「Aは娘を天文者の侍童に命じられたが、再三に及んでこれを断った。役人らは国家大賓を受ける重要な時に時宜を弁えないとしてAを叱責した」と。侍童とは給仕役をする少年少女で、この測量に 26 人が選ばれている。自分の娘を酒宴の接待役などに就かせたくないと勇断を振るって断ったAは、今日では称賛にもあたる事例ともいえる。測量が強行された文化年間（1804～1818）は自然災害（台風、長雨、早魃・蝗害）が相次いで襲来し、種子島の経済状況は史上最悪の状況にあった。その最中に強行された幕府勅命の大事業であったから、十分な対応がなされなかったのは当然であったのかもしれない。

新史料のご紹介

このたび、榕城松下の前田家に伝わる「前田豊山関係古文書」が多数寄せられました。江戸時代の前田家の役割のほか、豊山と天囚の関係性や島外の政治家等と豊山・天囚のやりとりが分かる大変貴重な史料です。今後史料の整理、分析を進めていくこととなります。

- ①江戸時代初期の武術関連の免状（慶長年間）
- ②西村天囚が前田豊山へ宛てた書簡
- ③西村天囚の母浅子が前田豊山夫妻へ宛てた書簡
- ④西村天囚と親交のあった政治家等の書簡
- ⑤前田家に伝わる近世文書
- ⑥種子島の人々から前田豊山に宛てた年賀状
- ⑦大日本教育賞から受賞した前田豊山の表彰状



③西村浅子から前田豊山夫妻へ宛てた書簡

令和 3 年 12 月 27 日発行 第 7 号 [発行] 西之表市 [編集] 企画課 歴史文化活用係
〒891-3193 西之表市西之表 7612 番地 電話 0997-22-1111 (内 280) FAX 0997-22-0295



西之表市史編さんだより 第7号



国上野木之平の民俗行事「トシドン」について 長野 勝 (国上担当)

野木之平集落では、年の瀬の大晦日の晩に、来訪神の民俗行事「トシドン（正月ドン）」が行われています。甕島の「トシドン」は 1997 年に国の重要無形文化財に指定され、2009 年にはユネスコの無形文化遺産に登録されています。野木之平は、甕島から移住して 135 年を迎えますが、野木之平に移住して以来、自分たちの先祖が生まれ育った甕島の伝統行事「トシドン」がそのまま传承されています。

トシドンは天上に住んでおり、いつも子どもたちの行動を見えています。大晦日の晩になると首切れ馬に乗って降りてきて、子どもたちの家を訪れ、行いの悪かった子どもたちを戒めてまわる伝統行事です。戦前までは各家庭の親がトシドンに扮していましたが、現在は青壮年、中学生が中心になって行われています。12 月 31 日の大晦日、まず集落の信楽寺に集まって準備と打合せを行います。トシドンになる人は鬼に似た面をかぶり、シュロの藪で体を覆い、片手に大きな刃物を持って、大人でもゾッとする青と赤のトシドンに扮します。トシドン役はあらかじめ、各家庭の子どもの長所と短所を知らせたメモをもらい、それを持って家々をまわり始めます。トシドンを先頭に 4～5 人の脇役が歩き、目標の子どものいる家の前に来ると、鉦を打ち鳴らし、トシドンが家に向かって吠えるのです。家に入ってきたトシドンの姿の恐ろしさに、子どもは泣き出し、家中を逃げまどいます。子どもの名前を呼び、目の前に座らせて、「親の言う事を聞いといか」「勉強はしといか」等々親の言えないことをズバリ説教してくれます。子どもたちは、良い子になることをトシドンと約束します。最後は歌を歌わせ、ケンケン（片足飛び）をさせて気をほぐし、褒美に大きな年餅を与えます。トシドンは、「来年も来いからな、良っかー」「ちゃんと天から見といちゃろー」と言いながら帰っていきます。子どもたちは、悪いことをしてはいけないということが強く心に残ります。今でも、野木之平の子どもたちを健やかに育ててきた伝統行事が、後世へしっかり受け継がれています。大晦日のトシドンの来訪は、野木之平の人々の一年の締めくくりと、新しい年への夢と希望にあふれた心温まる民俗行事です。今年も、首なし馬に乗ってトシドンがやってくるのも、もうまもなくです。



玄関に現れたトシドン



下西上石寺の元旦行事 石原 仁 (下西担当)

上石寺に昔あったけれども、今はなくなった元旦の行事「若水汲み」と「年始会」を紹介しようと思います。若水汲みは地域により時間、やり方、唱え文句が違います。上石寺には共同井戸が 4 つあり、2 つはバケツで、もう 2 つはつるべで汲む井戸でした。私たちは「イタンカシラ」と呼ばれる井戸で、バケツで汲んでいました。この井戸を利用していたのは 9 戸でした。時間は「一番鶏が鳴いてから」というところもありますが、私たちは午前 0 時に一家の主人が水汲みに行きました。米を紙に包んで置いて帰るので、自分が何番目に来たかが分かります。1 番早く行くと、「今年はマン（運）が良い」と言うものでした。塩と焼酎で祀ってから、杓でタンゴ（桶）に「水は汲まらずに黄金汲む」と唱えながら汲み、こぼさないようにして家に帰ります。その水でお茶を沸かし、仏壇に上げ、顔を洗って今年も健康でいられるよう祈るのです。若水汲みは、昭和 32 年頃までは行っていました。

朝になると、神社に大人たちが集まり年始会がありました。そこでは、「めでた節」と「高砂」が昭和 25 年頃までは唄われていました。高砂は 4 番まであり、1 番は「尾上の松」、2 番は「四海波」、3 番は「花と千秋楽」で構成されていました。4 番は不明です。この後、数え年 15 歳（中学 2 年）の男子は父親と並び、父親が「15 歳になったのでよろしく」と皆に紹介し、男子は皆に刺身を配って焼酎を注いで回り、最後に焼酎を飲んで一人前（成人）となりました。これを「ちょう入り」と言いました。これは昭和 27 年にはありましたが、いつまで続いたか分かりません。今でも年始会がありますが、焼酎 1 杯と小餅（オーセンマー）があるだけとなっています。



月窓亭で再現した若水汲み

自然部会

河川のエビ・ヤドカリ・カニ類を知っていますか？

皆さんが住んでいる種子島と西之表市の自然の特徴を、河川に生息している甲殻十脚類（エビ・ヤドカリ・カニ類）から明らかにしたいと思い、従来の研究成果と2020年、2021年に実施した現地調査結果から検討しています。現在、結果の集計が終わり、市史の執筆に取りかかったところです。概略を述べますと、種子島の河川で確認された種の数は49種で、最も多く出現したのはスナガニ科の13種、次いでモクズガニ科が12種、そして、テナガエビ科とベンケイガニ科が6種と続きました。西之表市に関しては、湊川を例として調査しました。上流～中流域（大田地区）、そして下流マングローブ林内と河口域で採集調査しました。その結果、ヌマエビ科が3種、テナガエビ科が1種、ハサミシヤコエビ科が1種、モクズガニ科が5種、ベンケイガニ科が3種、サワガニ科が1種、そしてスナガニ科が3種と7科17種の甲殻十脚類が確認できました。

河川の規模や環境の多様性を考慮すると、上・中流域よりも下流・河口域の甲殻十脚類相の方が多くの種が生息していることがわかりました。今後、さらなる調査研究が継続されれば、もっと多くの種が出てくると思います。今回は、これらの情報をもとに、種子島並びに西之表市の自然の特徴を検討しています。検討に際しては、隣接する屋久島の甲殻十脚類相と比較しながら、その共通点や相違点を明らかにし、その理由をそれぞれの島の地理的相違や両島の形成過程などを考慮し、更に甲殻十脚類各種が持っている生活史特性などと絡めながら考えています。結論は現時点ではまだ出ておりませんが、市史には間に合わせるつもりです。乞うご期待を。 鈴木 廣志（鹿児島大学名誉教授）



河口域のヒメシオマネキ

古代部会

国府所在地の調査について

私の担当は、種子島が史料に登場する7世紀頃から令制国としての多嶺嶋が廃止される9世紀前半（天長元年＝824年）までで、当該期の種子島の歴史復元を目指しています。古代史の基本史料は、六国史（『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』）と呼ばれる8・9世紀に政府によって作成された編年体の歴史書です。ただ、その内容は天皇の事績中心のため、地域の歴史はそれだけでは復元することが出来ません。地域の実態を明らかにするために必要なのが、考古学・歴史地理学といった学問の方法です。

『続日本紀』の記事により、8世紀の初め種子島・屋久島には多嶺嶋という令制国が設置されたことがわかりますが、その国府がどこにあったかは記載されていません。これまでの研究で候補地（国上説：国上小学校付近・奥神社付近、慈遠寺説：慈遠寺付近、南種子町下中真所説：下中八幡神社付近など）はいくつかあげられていますが、いずれも決定的な決め手に欠ける状況です。そこで令和元年11月に国府の候補地について立地などの調査や、島外との関係を示す資料である8世紀代の須恵器や土師器が出土した遺跡や遺物の調査を行い、国府の所在地を考える上での参考としました。



太田遺跡出土土師器片
(種子島開発総合センター所蔵)

国上説を補強する遺跡として、8世紀後半の須恵器や8世紀後半～10世紀末の土師器が出土した太田遺跡（西之表市国上寺之門）があり、遺跡の所在地である寺之門という地名は国分寺との関係を想起させます。また、下中真所説を補強する遺跡としては、平安時代の掘立柱建物跡が検出された本村丸田遺跡（南種子町西之丸田）があり注目されます。

竹森 友子（黎明館資料調査編集員）

校区史部会

西之表市の石敢當

尾形 公雄（榕城担当）

石敢當（セッカントウ、イシガントウなどと呼ぶ）とは、丁字路や曲がり角の突き当りに置かれ、「石敢當」と書かれた魔除けの石碑や石標です。市中に徘徊する魔物は直進する性質があり、これに突き当たった魔物は跳ね返され、砕け散ってその奥の敷地へは災厄を及ぼさないと考えられたようです。この風習は中国が発祥とされており、日本へは16世紀末頃に伝わったとされ、主に沖縄県や鹿児島県に多く見られます。西之表市では、榕城校区の府本（麓、府元）と呼ばれる地域で多く見られたようですが、昭和36年の調査記録によれば、10基（中目5基、納曽5基）確認されていました。最近調査したところ、確認できたのはこのうち4基（中目2基、納曽2基）と、新たに2基（納曽1基、野首1基）の合計6基のみです。



榕城小学校南の石敢當

また住吉校区にもあると聞き、調べてみると能野里に2基確認できました。

丸みを帯びた自然石や四角に削り出した石（高さ30～75cm、幅20～45cm、奥行10～25cm）に、「石敢當」（あるものは「石眼堂」、「不動明王石敢當」）と彫られています。古いものでは、風化が著しく文字が読みづらくなっているものもあります。ほかにも気付かれないままひっそりと存在しているものがあるかもしれません。



能野里の石敢當

昔の月のない夜を想像してみると、漆黒の闇の中、木々のざわめきや落ち葉を踏みしめるような音を聞いたときなど、邪気や殺気を感じ、得体の知れないものに恐怖を覚えたかもしれません。そんなとき、人々の心に平安をもたらしてくれたのでしょうか。不思議な現象だった地震や台風、疫病などの「魔物」は今日では科学的に解明され、道路も改良や街灯の普及で広く明るい環境になり、「魔物」の概念は薄れ、石敢當の必要性が希薄になったことも減少の要因ではないかと思われます。

塵泊にもあったといえます。
情報募集中です！

時の流れが感じられます。

市史編さん事業の経過（10月以降）

- 10月7～9日 先史部会現地調査
- 21日 第1回市史編集委員会
- 25日 第1回先史部会
- 11月3～4日 牧野篤好氏資料調査
- 4日 池野田の神様像調査
- 5日 上石寺田の神山調査
- 7日 川迎田の神山調査
- 15～18日 牧野篤好氏資料調査
- 17～19日 赤尾木城周辺調査
- 26日 浦田神社調査
- 30日 武部田の神山調査
- 12月5～6日 縄文ロード調査ほか



池野の田の神様



上石寺の田の神山（スクボガ峯）



武部の田の神山



立山の田の神山

11月から、「田の神山」の現状調査を行っています。民俗学者下野敏見氏によると、昭和30年代には田の神をまつる山が市内に18か所あったそうです。現在は生活様式が大きく変わってしまいましたが、今でも上西など、大切にまつられているところもあります。また、以下の田の神山について情報募集中です。

ご存知の方は、是非教えてください。 本立・平田・伊関・沖ヶ浜田・西俣・安城下之町